

男女がお互いを尊重し、その人らしく生きる。
仕事も暮らしも楽しむ。
そんなあなたを応援する情報誌です。

特集

男の子育て事情



P3

イクメン座談会

「自然体で楽しんでいます」

P6

「男の子育て 便利帖」

P8

講座レポート

「イクメンパパの読み聞かせ講座
親子で絵本を楽しむために
お父さんへのアドバイス」

P9

データウォッチング

「10・1%」

10〜20歳代の時に
デートDVの
被害にあったことが
ある人の割合

P9

映画に見る女と男

『エリン・ブロービッチ』

P10

ワーク・ライフ・バランス
推進企業紹介





男の子育て事情

特集



最近、街中でベビーカーを押す男性を見かけるのも珍しくなくなりました。
出産の立会も多く見られ、保育園の送迎を担うパパたちも増えてきました。
とはいえ、下のデータからも分かるように、まだまだ多くの男性が積極的に関わるには難しいようです。
そこで、今回の特集は男の「子育て事情」について探ります。
いわゆるイクメンの皆さんにお集まりいただき座談会を開催、ざくばらんに語っていただきました。
男の子育てを難しくしているのは社会でしょうか？あなた自身でしょうか？
「感動の育児」を目指し、一歩前に進んでみませんか。

データにみる
男の子育て

実際に

「育児休業を取得した男性」は
「100人のうち2.63人」※①

「週60時間以上働く割合」が
最も高いのは「子育て期の男性30代」※②

男性の
「1日の育児時間」は
わずか「33分」※③

男性の「10人に3.46人」は
「育児休業を
利用したい」と希望 ※④



イクメン座談会

「自然体で楽しんでいます」

共働き家庭 こんなふうに分担しています

小倉◆保育園への送りは妻ですが、迎えることができるには私もします。一番の出番は保育園の行事で、全部参加するようになっています。男で毎回出ているのは私だけなので、保育園ではちょっとした有名人です(笑)。家事分担は特に決めていませんが、洗濯やお風呂掃除が担当です。**黒坂◆**うちは保育園への送りは私、迎えは妻です。営業職で時間の都合がつけやすいので、妻が残業のときは私が迎えに

写真左から

出席者

小倉敦史さん (32歳、公務員)

家族構成
妻(フルタイムワーカー)
長男(2歳)

黒坂和正さん (40歳、会社員)

家族構成
妻(フルタイムワーカー)
長男(7歳)、長女(5歳)

木村健二さん (42歳、会社員)

家族構成
妻(フルタイムワーカー)
長男(3歳)

行きます。共働きなので基本はフイフイ・フイフイですが、何でもできることをできるほうがやるようにしています。**木村◆**普段は6時半ごろには帰宅できますが、妻から急に何時に迎えをしようと言われると、仕事を切り上げて間に合わせるのが大変です。我が家では家事・育児は自然とお互いが得意なほうをやっています。私はいわゆる家事担当でお風呂掃除、洗濯、炊事、お皿洗い、妻は絵本の読み聞かせなどです。**小倉◆**初めは父親になれるのか不安はありましたが、自分流にやるしかないという気持ちで思いつき遊びんでいます。子ども目線で妻にはよく怒られていますが(笑)。**木村◆**子どもと2人きりだと時間を持て余すこともあるのですが、妻が休日出勤のときには遊びに行く場所を妻がいろいろお膳立てしてくれるので、それに乗っかって何とかやっています。

子育て

男にできないことはない

黒坂◆両親が近くに住んでいるので、どうしても迎えに行けないときや子どもが風邪をひいているときには看てもらいました。東日本大震災のとき、妻は自衛隊員なので1週間帰ってこなかったですけど、なんとかやりましたね。普段から有事のときは頼むといわれています。

小倉◆1週間はすごいなあ。うちはお互いの実家が遠いので2人でなんとかするしかないです。まだ近所との付き合いもそんなにないです。

木村◆うちは1週間もいなかったら乗り切れないですね。妻もある程度段取りは組むと思いますが、ヘルパーさんを頼まないで、1人では無理ですね。

黒坂◆つい最近も妻は3か月間研修で、帰ってくるのは週末だけでした。そのときも私が早く帰れないときは親に頼んでご飯を食べさせてもらいました。親には感謝です。それでもいつも何とかなるだろうと思っています。

小倉◆その場になったらなんとかやるしかないですね。うちは寝かす時が唯一大変です。寝るときはいつも妻にしがみついているので、いないときどうなだめていいのか苦戦しています。

木村◆そうそう。寝かせるときが一番大変ですよ。うちも「ママはすぐ帰ってくるから」とごまかしながら寝かせたこともありました。でも、最近は前日から「明日はママいないよ」と言い聞かせておくとうぐずらずに寝てくれます。本当のことを話せば子どもがに理解してく

れているのだと思います。黒坂さんはどうでしたか？

黒坂◆夜泣きしたときも一晩中抱っこしていたり、妻がいなくてやっぱ寝るときが大変で、いろいろ工夫しながらやりました。ある時、三人で私を真ん中にして川の字に寝ようとしたのですが、子どもたちが承知しなくて、布団を広げて頭を中心にして放射状に寝ました。お風呂に入れたり、おむつを替えたり、母乳以外は何でもやりました。

小倉◆私も母乳以外は何でもできると思っています。

黒坂◆妻がいるときは私に寄ってこないのに、いなければいなくてなんとかなるものです。

そもそも

イクメンが当たり前

黒坂◆イクメン、イクメンと言われるけど、自分は当たり前のことをしているだけ。特に大変なことはありません。会社でも「子どもの迎えがあるので早く帰ります」なんて自然に言っています。

木村◆男の育児に関してうちの会社は世間で言われているほど厳しくはないけど、上司の目は厳しいです。でも仕事中心でやってきた上司も自分の経験を押付けけることはしません。早く帰れるか帰れないかは職種によるし、やるかやらないかは本人次第だと思います。

黒坂◆遅くまで残って仕事をしている人もいますが、人は人、自分は自分と割り切っています。男が育児することについてどんどん主張していけば社会が変わっていくんじゃないかな。

小倉◆同感ですね。他の人もどんどん子育てに参加して男の育児が当たり前、イクメンなんて言葉がなくなるぐらい浸透するといいですね。

木村◆公園でおむつ替えていると「パパすごいわね」なんて言われる。乗り物に乗るときもおじいちゃんおばあちゃんの近くに行くと「パパなのによくやるわね」って褒められたり、子どもをあやしてくれたり…。社会の目に、もう少し男の子育てが当たり前という意識があるといいと思います。

小倉◆そう、保育園に迎えに行くだけで良いお父さんになっちゃう。先日お妻が遅いので夕飯何にしようかと子どもと話していたら、先生が「お父さん作るんですか？ 頑張ってください」って。それだけでお父さんはすごい！みたいになるんです。（笑）

まだまだ少ない 男性の育児休業取得

小倉◆私は1か月育児を取りました。仕事の予定を考えると1か月が限界と思います、



妻の仕事と子どもを保育園に行かせるタイミングをみて取りました。

木村◆私の場合は妻の出産前に私が体調を崩していたので、自分の休養を兼ねて有休の延長で1か月休みました。でも育児はまさに24時間、大変で妻を助けるどころか、慣れない料理で金物を落として息子を泣かせししまうなど、妻を怒らせてしまう連続でした。自分の体を休ませるどころではなかったのですが、仕事とは違ういろいろな経験をしたことで精神的にリフレッシュでき、お陰で体調も良くなり復帰できました。

小倉◆育児が取りやすかったのは、職場の雰囲気良かったことに加えて、普段から「子どもが生まれたら一緒にいたい」といった意思表示をそれとなく言っていたからかもしれません。ポイントの仕事を抱え込まないで、できるだけ他の人と共有していた方がいいですね。ともあれ理解ある職場で恵まれていたと思います。

木村◆職場の雰囲気は影響しますね。私も1か月の長期休みを取ることに理解を示してくれた上司や同僚にはとても感謝しています。仕事は自分が抜けると迷惑をかけてしまうと思うがただ、1人抜けてもなんとか廻ると思います。もちろん職種にもよるけど。

小倉◆男性の取得率が低いのは、そうした意識も影響していると思います。

黒坂◆うちの会社では今のところ取った人は1人もいません。

小倉◆周りから理解されないんじゃないかという不安はあると思います。多くの

企業レポート

(株)赤ちゃんとママ社

子育てと仕事の両立は大変な負担です。中小企業ではどんなサポート体制があるのか、(株)赤ちゃんとママ社を訪ね、総務部長・関二三男さんに企業側から見た育児事情を伺いました。



同社は育児雑誌を発行する出版社です。社員数は26名で、うち育児中の社員は7名。職種は編集、営業、管理部門です。育児中の社員には出退勤時刻に融通を利かせています。

平成21年には、厚生労働省から子育てサポート企業として「くるみんマーク」を取得しました。社内ではパパ休暇と称して、育児のための休暇を推奨しています。昨年、営業管理事務の男性社員にお子さんが誕生しました。この社員は特別休暇（5日）と有給休暇を合わせて約3週間育児のための休みを取りました。男性にとって有給休暇を活用するのも一つの方法ではないでしょうか。

一般に育児休業や長期の有給休暇をとるのが困難な職種がありますが、同社のこれからの課題は、営業職から育児休暇申請が出てきた場合の対応策とことです。

男性が取るようになれば、お互い様でそのずと理解し合えるようになっていくのではないのでしょうか。不安を感じている人の気持ちはよくわかるので、自分の経験を伝えるなどして自分から率先して広げていきたいと思っています。黒坂さんは、取ることを考えませんでした？

黒坂◆うーん。育児は考えなかつたけど、2人の話を聞いてると、取って1日中一緒にいるのもよかつたかなと思いました。私の場合は営業部で担当の仕事を1人でやっていて、取るのとはなかなか難しいですね。

木村◆取りたいと思っても現実的には取れない職場の状況もありますね。

黒坂◆大企業と中小企業では事情も違いますし、まして子育ては女性の役目という職場だと取りづらいと思います。それと、男性の場合、収入面の問題も大きいと思います。大抵は男性の所得のほうが

高い場合が多いので、給付金が支給されるとはいえ、その期間は所得が減ってしまうわけですから。

小倉◆実際、育休中は収入面がきつかったです。

黒坂◆妻がパートタイマーの場合のように、夫婦の所得に格差があれば夫が育休を取れないのは当然です。十分な保障があれば男性も取りやすくなると思います。

パパ友つながりから 広がる地域の輪

黒坂◆今、四谷中学校で野球の監督を11年しています。四谷では、小学校と中学校が地域共同学校といって、四谷の子どもたちは四谷で育てるという地域のつながりがあります。引越してきた人も、保育園で地元のお父さんと親しくなっ



地域の輪に入ってほしいです。うちの子どもの保育園は「ライオンの会」という親父の会があり、土曜日に新宿御苑に行ったり、運動会にはお父さんお母さんが揃って子どもたちにダンスを見せたりして活発に活動しています。打ち上げはみんなで盛り上がります。卒園してからも集まりがあつて良いお付き合いができていますよ。

小倉◆お父さん同士の交流がうらやましいなあ。きっかけ作りをどうすればいいのだろう？

黒坂◆最初はお母さん同士で連絡を取ってもらおうといいですね。お父さんと子どもたちと一緒に楽しむ機会があると、お父さん同士も仲良くなりますよ。まずは誰かが音頭を取ってやるしかないですね。

小倉◆地域の輪を広めたいので、音頭取りは私がやろうと思います。

木村◆私もです。実は、保育園でいつも会うお父さんと仲良くなつてサッカーとかフットサルをしませんかと声をかけた

いと思っていました。他の保育園のお父さんともつながりができますし、子どもと一緒にできるいいですね。この座談会で男同士話し合えたのは心強く、この縁をパバ友のきっかけにしたいです。

豊かな時間、

育児休業の意義は大きい

小倉◆私にとって育児を取った意味はとても大きかったですね。取る前は、妻が育児で一日中家にいるのになぜご飯の用意をしないだろうと思っていたんですが、子どもの相手をしているとなかなかできないことが身をもつてわかりました。妻の大変さを頭でわかるのと体験してわかるのでは全然違いますね。

木村◆2人目が生まれたら、今度は本格的に育児を取ろうと思います。

小倉◆子どもの成長がみられたのもうれしいです。子どもに何か残そうと思つて、毎日写真付きの日記をつけました。妻はそれを大切に取っておいてくれて、将来、宝物になるのではないかと思います。子どもは私が大好きなんです（笑）。そうなつてくれたあの1ヶ月は大きかったですね。

木村◆今は大変ですが、子どもが大きくなつて、子育てに参加してきたことが良かったといつか自分のなかで気づくときがあるのではないかと期待しています。仕事では味わえない得難い経験をし、復帰後は仕事も頑張れるようになりました。

小倉◆職場の窓口にはいろんな親子が来られるのですが、時々育児が大変そうな

方を見かけます。そんな時は積極的に声をかけるよう心掛けています。

黒坂◆子育てするようになって、自分を育ててもらつてゐるなと感じます。子どもを持つ前の自分と比べると、人間的に成長できた気がします。

小倉◆同感です。子どもとふれあう生活がすごく楽しいですし、豊かな時間だと思ひます。普段の生活が楽しいから仕事も明るく前向きにできる。視野が広がつて自分が成長しているのを感じますね。

木村◆子育てをきっかけにワーク・ライフ・バランスも取れてきていると思います。男の子育てが進めば男性にとつても生きやすい社会になるのでは。

黒坂◆それは確かですね。子育ての喜びをすれば、仕事が生きていなんて考える男性も少なくなるでしょう。

小倉◆私の場合、子育ての経験が仕事にもとても役立っていると思います。

黒坂◆大きくなるにしたがつて子どもと関わる時間が少なくなること考えれば、この時間を大切に接していきたいです。

木村◆男性の育児参加が進めば、女性のエネルギーをもつと社会参加の方向に向けられると思います。労働人口が減つてゐる現状にはプラスになると思ひます。

小倉◆子どもが生まれて一番大変な時期に育児を取つて夫婦で理解し合い助け合えたことは、今後の生活に良い影響があると思ひます。

黒坂◆うちも何でも溜めずに話し合つて協力し合いながらやっています。お陰で妻とコミュニケーションが取れています。

夫婦仲の良い家庭環境の中で、子どもが親の姿を見て素直に育つてくれることが願ひです。

木村◆男性の得意な分野、女性の得意な分野があると思うので、それぞれのパートナー同士で得意な分野を補完し合いながらうまく子育てできたらいいと思ひます。

小倉◆私たち3人は当たり前のように子育てをしていると思うけど、社会全体となるとまだまだ難しい。職場の環境や制度の充実はもちろんですが、一人ひとりが社会を変えていくんだという気持ちが必要だと思ひます。

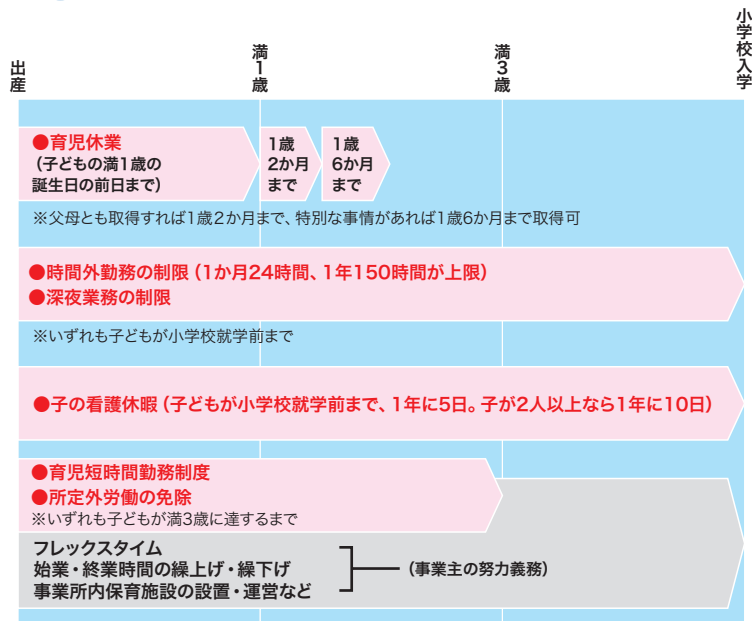
黒坂◆そうですね。多くの父親は個人的には子育ての意義を感じていると思ひます。現状を打開するには、それぞれができることをどんどん実践していくことではないでしょうか。

男性の育児休業取得は、まだまだ少ない状況が続いています。男性が積極的に子育てに参加するためには、職場の上司や同僚の理解を促進するほか、地域における父親同士の情報交換や仲間づくりが大切です。今回座談会に参加した3人とも、子育てに関わつたことで、父親としての成長を感じ取れたようです。

積極的に子育てに関わつてゐる3人の「イクメンパパ」の経験を参考にすれば、短期間の育児休業を取得してみるなど育児休業制度を上手に活用して、自分にあつた仕事と子育ての両立について考えてみませんか。

図1

仕事と育児の両立のための支援制度



子育てに直面したものの、
「時間がない」
「どうすればいいかわからない」
と思っている男性も
多いのではないのでしょうか。
一歩踏み出すきっかけになる
情報を紹介します。

育児休業活用編

育児・介護休業法では、仕事と育児の両立のための支援策として、図1のような制度が定められています。これらの制度を活用すれば、夫婦で子育てをしやすくなります。

育児・介護休業法の改正(平成21年6月)

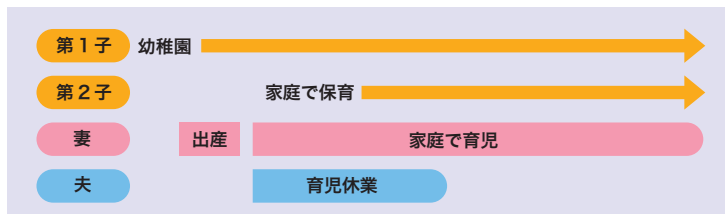
図2

育児休業の取得例

配偶者が専業主婦の場合

妻の産後8週のうちに育児休業取得
～出産直後をサポート～

【動機】 出産後の妻をサポートするため(家事や上の子の世話を中心に)
【期間・タイミング】 第2子出産直後から、夫が3カ月の育児休業取得

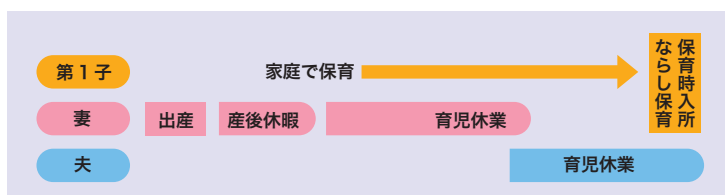


新生児と幼稚園児の子育てを夫婦で分担することによって、子育てに気持ちの余裕が生まれます。夫婦共に日に日に成長していく子どもたちの姿を実感することができます。

配偶者が仕事をしている場合

妻と交互に育児休業取得
～妻の職場復帰をサポート～

【動機】 「できるだけ早く復帰したい」という妻の希望、本人の「育児を経験してみたい」という気持ち
【期間・タイミング】 妻が4カ月の育児休業取得後、夫が2カ月の育児休業取得



妻が子育てに慣れてきたころに交代すれば、コツや子どもの特性を教わることができ、初めての子育てにも取り組みやすいかもしれません。

により、育児休業の取得方法が広がりました。育児休業は、もちろん女性だけではなく、男性も取得できますし、2人で同時に取得することも可能です(パパ・ママ育休プラス)。また、配偶者が専業主婦(夫)でも取得できます。図2に、育児休業の活用例をいくつかあげてみました。それぞれのご家庭の事情に応じた取得方法を考えてみてはいかがでしょうか。

一方、職場によってはまだまだ取得しにくい場合があります。そのような場合

は、まずは有給休暇を利用してみませんか。たとえば、出産直後の大変な時期に1週間程度有給休暇を利用してみる。わずかな数日でも、家族や子育てのための一日を過ごしてみると、いつもとは違う景色が見えてくるかもしれません。

なお、育児休業中は、育児休業給付金の支給や、社会保険料の免除などの経済的支援もあります。育児休業給付金は、原則賃金の40%ですが、当面の暫定措置として50%に引き上げられています。

出産、子育ての 最初の一步は「両親学級」



「両親学級」は初めて母親・父親になる方が、妊娠中の母体の変化や、分娩のプロセス、産後の新生児との生活について学び、妊娠や出産、育児の不安や心配を解消する目的で行われています。特に仕事で忙しい父親にとっては、日常の妊婦の大変さや出産においての不安、心配をより深く理解できるチャンスです。時にキャンセル待ちもある程の人気講座です。12月1日(土)、落合保健センターで行われた両親学級取材しました。

当日は20歳代～40歳代の28組のカップルが参加しました。5組ずつのグループに分かれ、おのおのに助産師がつき、細やかに指導を受けます。

新米の父親が最初に行う体験は、3キログラムの重さの人形を使った沐浴の練習です。緊張しこわばっている様子に、助産師の「赤ちゃんに声をかけてください」「人形なので、おとなしくしていますが、赤ちゃんはギャーギャー泣きだします」「男の子は気持ち良くなって、おしっこをしますよ」と、ユーモアをまじえた声かけで、次第に心もリラックスし笑顔が見られます。側でエプロン姿の父親を見守る母親も、頷きながらメモを取ったり、時にちょっと介助したり共同作業に励みます。グループ内で1組終わるごとに拍手でねぎらい、交流が育まれています。子育ては習う場がなく参考書やマニュアル本だけでは不安ですが、実践したことで心の準備ができたようです。

妊婦体験では、妊娠体験ジャケットを着用した父親から「重くて動きにくいことが分かりました」「階段を下りるとき、先が見えなくて危ないと思いました」など、率直な感想が聞かれました。父親に「お腹の赤ちゃんの重さを体験してもらい、つらさを共有できたことは、とても良かったと思う」と母親も話していました。

最後に行われた臨床心理士の講演では、「赤ちゃんは肌の感覚から家庭、家族の雰囲気を感じ取り安心します。母親と父親の会話、コミュニケーションが大切です」とのアドバイスに、参加者は真剣な面持ちで聞き入っていました。

サポート編

核家族が進む中、子育てにも地域のサポートが欠かせません。「子育てしやすいまち」を目指す新宿区ではさまざまなサポート体制が整えられています。

●両親学級

初めての出産・育児は不安なものです。両親学級では、父親の沐浴実習やカッパルで学ぶ出産・子育てに関する専門家の講演があります。毎月1回または2回、新宿区の4つの保健センター持ち回りで原則土曜日に開催されています。詳しい

日程は『広報しんじゅく』毎月25日号でお確かめください。

●ファミリーサポート

ファミリーサポートは、子育ての援助を必要とする方(利用会員)と、子育ての援助を行いたい方(提供会員)とを結び、地域で子育てを応援する会員制の相互援助活動です。病児・病後児預かり保育施設等の休業日に児童預かりなどを行っています。

【問い合わせ】

新宿区ファミリー・サポート・センター

(新宿区社会福祉協議会内)

電話(5273) 3545

●ホームスタート

家庭訪問型子育て支援です。6歳以下の未就学児がいる家庭に、研修を受けたホームビジターが訪問、お子さんと一緒に遊んだり、子育てや地域のこと、知りたいことをおしゃべりしたりします。

【問い合わせ】

地域子育て支援センター二葉

電話(5363) 2170

●新宿はっぴー子育てガイド

子どもを連れて遊びに行くのによい場所や新宿区で子育てするのに役に立つ情報がたくさん紹介されています。両親学級参加時や母子手帳配布時に無料で配布

されます。



【問い合わせ】

子ども家庭課

電話(5273) 4260

パパ友編

3～5ページの座談会の話題でもあったように、子育て中の悩みを話したり、一緒に活動できたりするパパ友がいれば、心強い上に、より子育てを楽しめるものです。幼稚園や保育所の送り迎えのときに声をかけて輪を作ってみるのもよいですね。インターネットで探してみるのもよいかもしれません。

●厚生労働省

「育メン(イクメン)プロジェクト」

子育て・育休体験談が数多く掲載されています。また、男性の子育てに関するフォーラムやシンポジウムなどが随時紹介されています。

<http://ikumen-project.jp/>

●NPO法人ファザリング・ジャパン

父親であることを楽しもうとする方々を支援するソーシャル・ビジネス・プロジェクト。悩み相談やQ&A、講演会やセミナーなど幅広い事業を展開されています。

<http://www.fathering.jp/>

「イクメンパパの読み聞かせ講座

親子で絵本を楽しむために

お父さんへのアドバイス」

講師・床井文子氏（東京子ども図書館）

冷え込みの厳しい朝11月24日（土）、13名の参加者が講師を囲みスタートしました。

講師は東京子ども図書館職員の床井文子（とこいあやこ）さんです。DVDでの東京子ども図書館の紹介から始まり、東京都内にあった四つの家庭文庫を母体として発足した、全国的にも数少ない公益財団法人組織の子どもの読書を専門とする私立図書館です。

床井さんは「子どもの頃は冊数をたくさん読むことがよい訳ではなく、心に響く本を何度も繰り返し読むことが大切」と話されます。また、0歳、1歳、2歳は言葉を獲得する時です。乳児は身近な大人が語りかける言葉を実によく受



けとめていきます。この時期には、親子の間に本が介在することなく、直接目を合わせて語りかけることや触れ合うことの方が大事です。

言葉の美しい響きや韻律を、身体性を伴って体験できるわらべ歌をまずうたってあげてくださいとすすめられました。

現代の子どもたちは、人と人を通しての言葉ではなく、テレビ、映像、機械的な音が溢れる環境に身を置いて育つため、言葉の力が弱くなっています。子どもたちのお話の聞き方にも変化が見られ、すんなりとお話に入れない子もいるようです。

お話を耳から聞いて心の中にイメージすることは、子どもの想像力を育みます。また、父親や母親という大好きな肉親の声を通して絵本を楽しみ、共に分かち合うことで、絵本は子どもにとってより大切なものとなっていくます。

子育て中にある講師が、子どもと絵本にまつわる家庭でのひとこまを紹介されました。

母親と何度も読んだことのある絵本を、父親が3歳の娘に初めて読んであげたとき、絵本のひとつひとつのエピソードを、父親があまりに面白がって読むために、娘もまるで初めて読んだように、その絵本を楽しんだそうです。子どもは読み手の心の動きに共感しながらお話を楽しむのです。また、子どもにとって母親が絵本を読むのは日常のこと、父親の場合は

特別嬉しいこととして、記憶に残る子も多いようです。

講師が布や指を使って、わらべ歌を紹介し、グリム昔話『赤ずきん』のお話を語りました。昔話絵本には、大人が残酷だと考えて中身を変えた再話が数多くあります。例えば赤ずきんでは、狼が死なずに逃げてしまうものもあります。ですが、子どもにとっては、最後に狼という怖い存在がいなくなるの方が安心してきる結末です。昔話は伝承に忠実な再話を読んであげてください。またどの絵本も、ブックリストなどを手がかりに、よい作品を選ぶことが大切です。「感想を求めたりせず、気に入ったお話や絵本を何度でも、字が読めるようになって読んであげてください」と繰り返し話されました。

出席者から「妻に勧められて参加したが、お話をとおして子どもの気持ちに戻り、懐かしい絵本もあり楽しめました」「10ヶ月の娘に絵本を読みますが、かじ

っておもちゃにして遊んでしまいます。今日参加して、子どもと向き合うときのヒントがありました」

「お話や絵本の読み聞かせの大切さを知り再認識し、子どもとの接し方も変わっていきます」

ふだん子どもに読み聞かせていても、どんな絵本をどのように読んで良いのか迷っている親が多く、講師のお話や絵本の読み聞かせを体験できたことは、これからも子育てに関わる父親にとって参考の手助けになったことを感じます。



父親におすすめの絵本を紹介



『うさこちゃん どうぶつえん』
ディック・ブルーナぶん・え
福音館書店



『スモールさんはおとうさん』
ロイス・レンスキーぶん・え
童話館出版



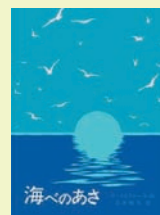
『くんちんのはたけしごと』
ドロシ・マリノさく
ペンギン社



『おやすみなさい フランシス』
ラッセル・ホーバンぶん
ガース・ウィリアムズえ
福音館書店



『とうさんおはなしして』
アーノルド・ローベ爾作
文化出版局



『海へのあさ』
マックロスキー文・絵
岩波書店

データ・ウォッチング

「10.1%」

10～20歳代の時にデートDVの被害にあったことがある

あなたは、交際中、次のような経験をしましたか？
 ● デートを最優先にしないと怒られる（怒る）。

好きな人とつきあっているはずなのに…

DVは夫婦間だけでなく、結婚前の若いカップルの間でも起きています。思春期や青年期の恋人間に起こるDVを「デートDV」といいます。内閣府「男女間における暴力に関する調査（平成24年）」によると、10歳代、20歳代に交際相手から暴力を受けた経験のあるのは、10.1%。そのうち、女性は13.7%、男性は5.8%です。およそ10人に1人の若者がDV被害にあっています。

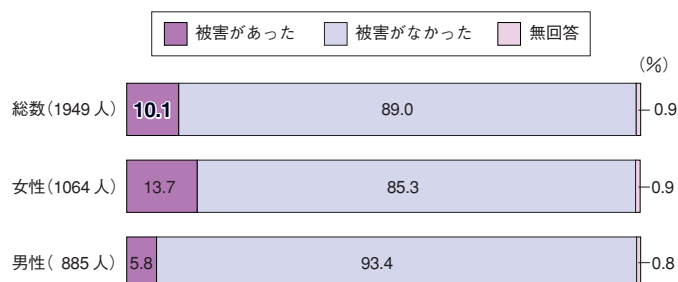
- 服装や髪型、映画や音楽など、好みや趣味を押し付けられる（する）。
- 携帯電話やメールの着信・発信履歴をチェックされる（する）。
- 一日に何度も電話やメールで行動を報告するように命じられる（命じる）。
- 嫌がっているのに性的行為を強要されたり（したり）、避妊に協力してくれない（協力しない）。
- 「別れたら死んでやる」などと脅される（脅かす）。

これらの行為は、すべてDVです。なぜ、愛する相手にこんなひどいことをしてしまうのでしょうか？

束縛を愛情だと思っていないか？

デートDVでは、自分の価値観を押しつけ、相手の自由を奪い束縛する行為が多く見られます。加害者は「恋人同士なのだから」「相手のことが心配だから」「自分のことを好きなら」という理由で、相手を自分の思い通りにしようとしています。一方、被害者は「恋人ならどんな欲求も受け入れて当然」「相手が自分を支配しようとするのは自分を深く愛しているから」と、束縛＝愛情だと思い込んでしまい、DVを受けているとは気づくことができません。昨今は携帯電話の普及により、いつでも相手を支配・束縛することができ、そのこともデートDVの長期化、深刻化に拍車をかけています。

交際相手からの被害経験



デートDVの加害者・被害者にならないために

恋愛とは、好きな人を思いやり尊重し合いながら、楽しく心地よい関係を築くことです。支配したりされたりするようなゆがんだ関係は恋愛とは言えません。

人は誰でも自分らしく生きる権利があります。自分と違う考え方や価値観を受け入れ、お互いが対等の立場でやりたいことができるように、支え合い、励まし合うことが恋愛なのではないでしょうか？ そんな当たり前の恋愛規範を大人が若者に伝えていくこともデートDV防止の一助になると思います。

映画に見る

女と男

『エリン・ブロコビッチ』

監督：スティーブン・ソダーバーグ
 主演：ジュリア・ロバーツ、アルバート・フィニー、アーロン・エッカート他
 (2000年公開)



金も仕事も学歴もない女性の、実話に基づくサクセスストーリーです。

ジュリア・ロバーツ演じる主人公のエリンは、3人の子持ちのシングルマザー。失業中で預金残高もわずかとあれば、なりふりかまわず稼ぐしかない。半ば強引に押しかけた弁護士事務所のアシスタントとして働く中で、ある日不審な書類を目にする。無学で弁護士資格のない彼女が、大企業の環境汚染の事実を突き止め、訴訟をおこす。相手企業の妨害、脅迫にひるむことなくネバーギブアップの精神で数々の困難に立ち向かう。初めは冷ややかな目で見ていた住人たちからも信頼を得て、ついには米国史上最高額の和解金を勝ち取る。

私たちは、女だから、学歴がないから何もできないと決めつけてしまいがちですが、エリンの信念と勇気ある行動は、そんな偏見を見事に打ち破り、前に踏み出す勇気と希望を与えてくれます。

ワーク・ライフ・バランス推進企業を応援しています

★ワーク・ライフ・バランス推進企業として新たに認定された企業を紹介します。

新たに推進企業として認定した企業（※番号は認定番号）

31 株式会社赤ちゃんとママ社（育児雑誌の発行） 【認定の分野】子育て支援 働きやすい職場づくり

育児をする母親を支援する目的の雑誌を出版しており、会社内でも結婚による退職もなく、育児をしながら働き続けられる環境を整えています。また、育児支援だけでなく、ワーク・ライフ・バランス啓発雑誌を出版しており、ライフの充実の重要性も啓発しています。

32 フコクしんらい生命保険株式会社（生命保険業） 【認定の分野】子育て支援 介護支援 働きやすい職場づくり

育児・介護支援について法を上回る制度に加え、男性の育児休業取得者や、介護休業取得・復帰実績もあり、体制が整っています。また、「休業中および職場復帰前後の支援」「介護休業期間の延長」の取り組みを進めるなど、制度も充実しています。

33 株式会社Casa（賃貸住宅の家賃保証システムの提供） 【認定の分野】子育て支援 働きやすい職場づくり

出産・育児休業から復帰した社員や、育児短時間勤務をしながら働く社員も存在しています。外部セミナーの受講に伴う費用を会社が負担するなど、社員のスキルアップにも力を入れています。

34 ブリティッシュ・カウンシル（英国と日本の国際文化交流） 【認定の分野】子育て支援 働きやすい職場づくり

女性の多い職場で、フレックスタイム制度や在宅勤務などにより働き方の融通が利きやすい職場であり、育児をしながら働く女性も多く、キャリアロスになることもありません。ワーク・ライフ・バランスを高い次元で実践しています。

【問合せ】男女共同参画課 ☎(3341)0801

本の紹介

『うさぎドロップ』

著者 宇仁田ゆみ／祥伝社



つい勢いで、6歳の女の子と一緒に暮らすことになってしまった30歳で、まだ独身のサラリーマンが育児に奮闘する物語です。マンガならではの突飛な設定ではありますが、育児に参加しようとする男性、特にシングルファザーとして子どもを育てている男性には「分かる、分かる」とうなずけることが多いのではないかと思います。保育園への入園方法は分かったものの、どの保育園にすればいいのか。会社に近い保育園だとすぐに迎えに行けるけれど、満員の電車で子どもを乗せなくてはなりません。自宅に近いと、残業してはお迎えに間に合いません。主人公の大吉は、「りんちゃん」を育てるために、バリバリの営業から、時間の融通のきく倉庫部門への異動を願い出るのです。

夜、飲みに行くこともなくなり、世間から見れば出世街道を外れた大吉ですが、「俺がりんちゃんを育てているのか、りんちゃんに育てられているのか分からなくなる」とつぶやきます。

子どもを育てていくことで、我慢したりあきらめることがあったとしても、それは、「犠牲」という言葉にだけ置き換わるわけではないのだとしみじみ思えるマンガです。

『社会を変えるには』

著者 小熊英二／講談社



昨今、男性の育児が叫ばれるようになりました。このような関心を持たれた方にはぜひこの本を手にとっていただきたい。新書ながら517ページあります。説明が丁寧で難しいことも判りやすく書いてあります。ページ数が多くなるのも納得できます。

第1章で日本が「工業化社会」から「ポスト工業化社会」へ移り、現在どのような社会状況におかれているかを説明しています。労働環境の変化が激しく「男性の育児」にも繋がっています。

育児、教育、介護と難問が目白押しの今日、第4章では代議制民主主義の限界を論じます。第6章の「異なるあり方への思索」では政府の新しい役割としてエンパワメントを挙げています。具体的に、例えば家族政策について、男女の役割が変わっていることを教育で教える。最低限の家事が誰でもできるように講習する。これらを相談できる場所も設置する会社と政府にお任せ等々。

自分が動かなければ、自分が変わらなければ社会は良い方向には変わりません。身近な問題について考えるとき、力になってくれる一冊です。

『仕事と子育て 男たちのワークライフバランス』

著者 中岡真一、鷲尾梓／ヒューマンリソース研究所



「ワーク・ライフ・バランス」という言葉があちこちで聞かれるようになってきた昨今、「仕事一辺倒ではなく、家事や育児にも関わらなければ」と焦っている男性も多いのではないのでしょうか。「でも具体的にどうやるの？」

これはそんな疑問を持つ男性とそのパートナーにぜひ読んでいただきたい本です。

前半は育児をする男性たちの現実とホッネを聞き取ったドキュメンタリー。上司に育児休業の取得を申し出るまでに一週間かかったが、言ってみると案外簡単に受理されたこと、家事や育児をするようになって夫婦間のコミュニケーションは良くなったけど、同僚との飲みコミュニケーションが減ってちょっと寂しいことなど、仕事と家庭の両立に四苦八苦している姿に思わず共感したり苦笑したり。後半ではおのおののワーク・ライフ・バランスを見出すきっかけとなるアクションプランを提示。【父親タイプ診断チャート】で、各タイプの典型的な疑問や悩みに応えてくれます。

そもそもワーク・ライフ・バランスには唯一の正解があるわけではありません。状況や希望に応じてその人なりのバランスがあるはずです。あなたもこの本をヒントに、自分とパートナーに最適のワーク・ライフ・バランスを見つけてみませんか？

区立保育園5園が区立子ども園として開園します

子ども園とは

保育園と幼稚園の機能を合わせ持ち、小学校入学前の子どもに保育と教育を一体的に行うとともに、地域の子育て家庭の支援を行う施設です。

平成25年4月より次の5園が子ども園となります。子育て支援として未就園親子の交流の場を提供します。大木戸子ども園では新たに一時保育と合わせて定期利用保育を行います。

子ども園名	住所	電話番号
大木戸子ども園（旧四谷保育園）	四谷4-17	(3358) 1431
しなのまち子ども園（旧信濃町保育園）	信濃町20	(3357) 6853
戸山第一子ども園（旧戸山第一保育園）	戸山2-26-101	(3202) 7879
西落合子ども園（旧西落合保育園）	西落合1-31-24	(3954) 1064
北新宿子ども園（旧北新宿第二保育園）	北新宿3-20-2	(3365) 0225

新宿区広報ビデオで子ども園が紹介されています。

<http://www.city.shinjuku.lg.jp/video/video0090.html>

新宿区ホームページの子ども園のページも合わせてご覧ください。

http://www.city.shinjuku.lg.jp/kodomo/index04_0703.html



【問合せ】子ども園推進課 ☎(5273) 4047

みんな集まれ
つながる笑顔

「ここ・からまつり」を開催しました

平成24年11月11日、新宿ここ・から広場で「ここ・からまつり」を開催しました。23年4月に全面オープンした「新宿ここ・から広場」は、子どもから高齢者まですべての世代が集える大規模な複合施設です。

今回で2回目となる「ここ・からまつり」には、当時の野田内閣総理大臣が視察に訪れ、中山区長とともに、集まった小さな子どもたちに「おおきなこぶ」の読み聞かせをしました。その後、子育て中のパパ・ママたちとの意見交換会が開かれ、子育てで困ったことや疑問に思っていること、行政への要望



子どもたちに読み聞かせ

など、活発な意見交換がされました。参加者のベテランママからは「子育ては一人で抱えないこと。声を出して助けを求めてください」と他の参加者にアドバイス。中山区長からも「行政・地域など社会全体で子どもや子育て世帯を応援しています」とエールを送りました。

その他、広場では、バルーンパフォーマンス・施設探検スタンプラリー・バンド演奏のステージ、高齢者らが指導するパソコンで年賀状作りやこけ玉作りなどの催しが行われ、子どもから高齢者までたくさんの方でにぎわいました。



子どもジャグリングに挑戦



バルーンアーティストTomolによるバルーンパフォーマンス

大募集

平成25年度編集委員

『ウィズ新宿』を いっしょにつくりませんか

プロ編集者の指導のもと、男女共同参画について学びながら情報誌を作成します。「取材をしてみたい」「記事を書きたい」「写真やイラストが得意」そんなみなさんのご応募をお待ちしています。

応募資格 土曜日(月1~2回、募集要項または広報3月15日号参照)の編集委員会に出席できる方。

区内在住または在勤・在学、18歳以上。

募集期間 平成25年3月15日(金)~4月10日(水)

募集要項は男女共同参画推進センターのほか、区内図書館・出張所・地域センター・新宿区ホームページで。

【問合せ】男女共同参画課

☎(3341)0801



しんじゅく女性団体会議

区内女性団体の連携と女性のエンパワーメントを目指す、年6回の定例会を行っています。現在11団体で活動中。平成24年度は通年テーマを「次世代育成」、サブテーマを「災害と女性」とし、災害に焦点をあてて下記の研修を実施しました。



・研修

「男女共同参画事業および第二次男女共同参画推進計画」
男女共同参画課

・講演会

「～災害に備えるために、自分たちの住む新宿区の現状を知る～」
講師・新宿区区长室危機管理課長 平井 光雄

・公開講座

「災害時に女性が地域で活躍するためには」
講師・早稲田大学文学学術院 教授 村田 晶子

・日帰り研修会

福島県いわき市男女共同参画センターおよび薄磯海岸地区視察

ただいま新規団体を募集しています(3月16日締切)。
詳しくは男女共同参画課 ☎(3341)0801へ。

発行

新宿区子ども家庭部男女共同参画課
新宿区立男女共同参画推進センター
〒160-0007 東京都新宿区荒木町16番地
TEL(3341)0801 FAX(3341)0740



発行日 平成25年3月6日

● 114号の編集を終えて ●

母親たちが孤軍奮闘し子育てをしていた世代状況は大きく変化し、イクメンと称して、父親も自然体で関われる社会環境になってきています。両親が助け合い子育てをしてこそ、わが子への愛情が育まれ、子どもとしても幸せなことです。取材、編集を経て、暮らしにくい厳しい中での結婚であり、出産、子育て、だからこそ必要な情報を取り入れ活用し、社会・地域・区民みんなで支え合う環境整備が、ますます大切だと感じています。(君塚 礼子)

今回のテーマは男性の子育て。今まさに取り組んでいることであり、力が入りました。また、編集作業の中で、自分の子育てに足りないこともいくつか発見できました。1年間の活動を通じて、結婚および子育ては男女お互いの協力がますます必要であることを、再認識できました。このような機会を提供頂けた新宿区、および丁寧にご指導下さった先生に感謝しております。今後も、男女共同参画に対する意識を改善するように協力致します。(木村 健二)

子育てや働くことに追われている毎日の中で、編集講座に参加して同じテーマでも立場によって受け取り方が違うことを強く感じました。参加しなければ子育てや共働きは当事者だけの問題とっていました。また、夫婦で参加させていただき、同じテーマを学べたのもパートナーとの新しい発見や楽しい会話につながりましたし、何よりも子育てや共同生活の意識が向上したように思います。編集委員は時間も必要で締め切りもありますが、参加することでより深い学びや経験をする機会があると思いますので、おすすめします。(木村 華苗)

「男性の育児」を通して考えたことは、メディアでは男性が育児休業を取得すれば万事解決の風潮です。果たして、そうでしょうか。基本は男女とも子どもとの接触時間を多くすることです。雇用されている人は有給休暇を育児にフル活用する。また、社会も取引先であれ、同僚であれ休暇取得を受け入れる土壌を築くことです。そのため休暇取得の本人は日ごろから誠実に自分の職務を果たすことが必要です。経営者も良質な労務提供を望むなら労働力再生産のための休暇に価値を認めていくことが大切です。(櫻井 計男)

子育ては大変なものの、振り返ってみれば大変なときが一番楽しかったです。男性も育児に参加すれば仕事とは別の視野を広げられるでしょう。確かにまだまだ壁があるようですが、夫婦が共に協力しながらの子育てが本来の姿だと思います。記事にするまでにはその現状や歴史やらを勉強することから始まり、社会に目を向けるきっかけにもなりました。この経験ができたことは幸運なことでした。(前田 さつき)

「お父さん一人でベビーカー」に全く違和感がありませんでした。が、思い返してみると私の子ども時代にはまず見かけない光景でした。いつの間にか当たり前の風景になっていく。皆が過ごしやすい社会に少しずつでも変化していけばいいなと思いました。編集委員になって、今まで考えてもみなかったことを無理にでも考えなければならない状況に身を置くことは新鮮で、勉強になりました。関係者の皆さま、ありがとうございました。(正木 めぐみ)

企画、取材、原稿執筆と、締め切りに追われながら無我夢中の1年間でした。結婚も子育ても、もう自分とは無縁のことだと思っていましたが、特集記事の編集を通して、若い世代が結婚・子育てをするためのよりよい環境を作るには、社会の一員として何をすべきかを、深く考えさせられました。より多くの人が生き辛さを感じずに、自分らしく心地よい毎日を過ごせる社会にするにはどうしたらいいか?この誌面がそんなことを考えるきっかけになるとうれいでした。(脇坂 文栄)

